
冴えない姫と見目の良い従者

篠崎冬華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冴えない姫と見目の良い従者

【Nコード】

N3993M

【作者名】

篠崎冬華

【あらすじ】

人類の行く先を描いた近未来。

始まりだけシリアスに、本編はラブコメディ？

地球に隕石が落下したことによって、様々な能力を持ち制約を受けられることになった地球生き残り。

これは、後に水の姫と呼ばれる人と、その従者のお話。

この話はフィクションです。
作者の頭の中の妄想を文章にしたに過ぎず、文中に出てくる団体、個人は一切関係ありません。

運命の日（前書き）

この話はフィクションです。

作者の頭の中の妄想を文章にしたに過ぎず、文中に出てくる団体、個人は一切関係ありません。

運命の日

21世紀終わり。

人類は人口の増加・資源の枯渇、地球温暖化などの理由から、宇宙という新天地を求めていた。

宇宙ステーションの完成により、数々の実験が行われ、着実に現実のものとなり始めた。それと比例するかのようになり、地球の疲労が目に見える形となり始めた。

海面の上昇、広がる砂漠。平均気温は留まるところを知らず、上昇し続けた。

間に合わないのではないかという思いから、人類は決断することになる。

国連主体による、プロジェクトの立ち上げである。

国と国の垣根を越えて、それぞれの技術を結集することを目的とし、政治の入り込む余地をなくした。

それこそが、今までの気象変化に対する対策の、遅々として進まぬ一番の理由だったからである。既にわが国がという思いを捨てなければ、間に合わないところまでできていたのである。

国という囲いを外してしまえば、いとも簡単に物事は進んだ。

宇宙ステーションでの実験を元に、直ぐに人類が居住可能な建造物に着手。それとともに、第二・第三の宇宙ステーションが作られ、実験はその規模を増した。

成果を無駄にすることなく、宇宙に浮かぶ建造物は作られ続けた。時限爆弾を抱えているような、そんな焦りから、人類は突き動かされ続けたのである。

そんな中、国同士にも変化が起こった。

今は争っている場合ではなく、一つの目的に皆で歩みをそろえるべきなのだ。

幾度にも渡る話し合いが持たれ、ある結論が出された。

世界中の核兵器を無くそう。

ある意味象徴的な意味合いでもあった。

開発されてから幾年月、この兵器によって様々な悲しみが生まれ、争いが起こった。これを無くそうというのである。

一刻の猶予もないことを知っていた目は、排除すらいとわらないものであった。

こうして、核兵器は地球上から無くなったのである。

そう、地球からは。

集められた核兵器はそれ自体で爆発しないように処理が施され、全て宇宙へと上がっていった。燃料として有益であるという意見が科学者から出たが、象徴としての意味合いのために、これらは全て破棄されることになった。

破棄される場所は太陽。

一度に燃やしてしまうのでは余波による危険も考えられるため、緻密な計算がなされ廃棄計画が始まった。

人類が宇宙へ大移住を始める半年前まで、それはとても順調に進んでいた。

人は間違いを犯す生き物である。

悪気がなくとも、時として最悪の事態を招くこともある。

核兵器の爆発処理を怠ったものが1つだけあった。

六角スパナを1つだけ忘れてしまった。

オイルのついたタオルを1枚だけ忘れてしまった。

これらが一つの空間に揃っていた。

ただそれだけ。

結果として、地球に隕石が一つ落ちた。

生き残った人類は、この日を運命の日と呼んだ。

運命の日、その後

地球の一部分の温度が一気に冷やされた。

遙か昔に起こったといわれる現象と、同じことが起こったのである。

病んでいた地球は、人類が18世紀と呼んでいた頃に戻ったのである。

ただし、隕石の衝突による衝撃で舞い上がった砂煙が、しばらくの間たゆたっていた。

そのしばらくの間に、地球に残っていた人類はその数をどんどん減らしていった。

隕石衝突時にどれ程減ったのか、砂煙による冬の到来で、どれほどの人が減ったのか。

それを知る術はなかった。

後の記録では、数百万人の人々が生き残っていたのではないかと記されている。

しかしこれは、あまり省みられなくなった。

必要とされなかったのである。

最も好まれた情報は、何が良くて何がいけなかったのか。

過去の人類が犯してきた過ちを、徹底的に洗い出したのである。

それはそれは簡単な結論であった。

自然を大切にすれば良い。

ただ、それだけだった。

ただ、それだけを、過去の人類の大多数が守れなかった。

そうして過ごすうちに、人類は数を減らしはしたが、増えるということもあった。

子供の誕生である。

劣悪な環境下で生まれたためか、生まれたときはなんともない状態でも、ある日突然障害が起こるケースが多数報告された。生き残っていた中に医師や看護師はいたが、原因を突き止める事も出来ず、無力さかられるだけだった。

ある日、転機が起きた。

目の見えなくなっていた子供の耳朶に、何かがついていた。

黒い石のようなそれは、ピアスのようにしつかりと食い込んでいた。本人は痛みもせず平然としている。

感染症をおそれた親が、外してくれるように医師に頼み込んだが、結合部を見た医師は首を横に振り、「無理だ」と呟いた。

どこから外せばいいのかも分からないほどに、ぴつたりとくつき食い込んでいたのである。

障害の起きた子供たちに、石のようなものが食い込んでいるという報告は後を絶たなかった。

色は、黒っぽいものか、白っぽいもの。

なぜなのかは分からないが、黒っぽいものは左の耳朶にしか食い込まず、白っぽいものは右の耳朶にしか食い込まなかった。

何かの前兆ではないかと調べ始めたときに、目の見えなくなっている左耳に黒っぽい石が食い込んだ子供がやってきた。

目が見えないはずなのに、大きく目を開けて走ってくる。

焦点の合ったその目に、大人たちは凍りついた。

「見えるようになったよ！」

嬉しそうな様子に、大人たちは当然嬉しい。だがしかし、いきなり見えるようになるというのはおかしい。

何があつたんだと、医師が焦る気持ちを抑えながら聞いていたときに、もう一人やつてきた。

今日、ここに来たばかりの子供である。

白っぽい石が右の耳朶に食い込み、何とかならないものかと、両親と放浪のすえに来た子供であつた。

今までの子供たちと同じように、両手が動かないという障害が現れていた。

しかし、この子もまた、両手が動いていた。

「いったい、何がどうなってるんだ……」

勉強してきた知識がなにひとつ通用しない状況に、医師は頭を抱え込みたくなつた。

「出会えたから」

後から来た子供が、先に来た子供に片手を差し出した。嬉しそうに、その手を握る子供。

「ずっと足りないって思つてて、やっと出会えた」

笑いあふ二人は、満ち足りていた。

「体がおかしかつたのは、足りなかつたから。だから、今は元通りになつたんだ」

「この関係って何だろうって、二人で考えた。そしたら、すごく良い言葉教えてもらったの思い出して」

白を耳朶につけた子供がその先を引き継いだ。

「主従関係ってというのが当てはまるねって。

ボクが主」

「それで、僕は従。

他にもいろいろ話してね、今までとは違うすごいことまでできるようになったんだ！」

興奮気味の黒をつけた子供を制して、白をつけた子供がつむぐ。

「それはまたでいいじゃない。

それよりも、今畑で育ててる野菜、もっと水が欲しいって言うてるよ」

人類に起こった変革が、認知された瞬間であった。

白は右耳にしかつかず、主従の主である。

黒は左耳にしかつかず、主従の従である。

白は自然に関する能力を持っている。

黒は自身に関する能力を持っている。

いつしか白は、ホワイトと呼ばれる。

いつしか黒は、ブラックと呼ばれる。

どちらももたない人は、ノーマルと呼ばれる。

人類の分類は、人種や国ではなく、石を持つか持たないかによって区別されるようになった。

医師の間で広まった検査方法がある。

診察の始める前にすること、白い石と黒い石を耳に当てるのだ。

そうして地球の生き残りが落ち着きを見せ始めた頃。

宇宙へ移住した人たちが降りてきた。

かつての技術を持って……。

人類は自然にとって有害なものを使えなかった。

ホワイトが苦痛を感じ取り、ブラックが実力行使でその原因を取り除くために。

初めて人は、自然と共存できる道を歩み始めたのである。

……

運命が降ってきた日から80年程がたったある日。

一人の男の子が生まれた。

すくすくと成長し、将来は大多数の女の子を虜にするだろうと思わせる顔立ち。

いや、すでにご近所を虜にし始めていたのだが、3歳を過ぎた頃、突然不思議なことを言い始めた。

「よく見えない」

驚いた両親は診察を受け、自分たちの息子がブラックであることを知った。

視力が著しく低下し、どんな医療をもっても治らない。

唯一の治療法は、自分のホワイトを見つけること。

ただ、それだけしかなかった。

それまでは、落ちた視力を補うために、分厚い眼鏡をかけることになった。

矯正はしたものの、彼の視力は一定には定まらず、不器用に日常生活を送ることになった。

野暮つたい眼鏡に、とろとろとした動き。

将来を期待されていた顔は、人々の記憶から薄れ、やがて忘れられていった。

少年の視力が低下した頃、女の子が生まれた。

とてもよく泣く子で、看護師たちも手を焼いていた。

泣き止んでいることのほうが少ないことに医師が気付き、いつもの検査を試みたところ、ホワイトであることが分かった。

障害のために泣いているのだと分かったが、簡単に見つかるはずの障害がわからず、病院ではいくつもの検査が行われた。

それでも原因が分からないため、いろいろな病院に問い合わせ、珍しい事例を集めたところようやく一つの仮説が立てられた。

呼吸がうまく出来ていないのではないかということであった。

泣き続けていたために息も絶え絶えになり、保育器の中でぐったりしていた女の子に、高濃度の酸素が送り込まれた。

やっと満足に息ができたのか、女の子はゆっくりと眠りについた。

こうして彼女は、自分のブラックを見つけるまで、酸素ボンベとマスクとともにある生活を送ることになったのである。

第1章 1 姫と従者の苦難（前書き）

まだ出会いません。それまでコメディな部分は出てきません。

第1章 1・姫と従者の苦難

ホワイトの少女が生まれてから5年の月日が流れた。

黒髪に緑柱石のような瞳を持っていたから、ヒスイと名付けられた。

ヒスイは酸素ボンベとマスクをつけ、すくすくと成長しなかった。呼吸がうまく出来ないということが、成長の妨げになっていたのである。

初めて話した言葉は、「くるしい」。周りが何度も何度もそう聞いていたために、その言葉を何よりも早く覚えた。

歩き始めたのも遅く、丸々しているはずの赤ちゃん時代は信じられないほどにやせ細っていた。

それでもヒスイは生きていた。

少しでも健康になって欲しいと、毎日日光浴をしていた。それは結果としてそばかすを作ってしまう原因となったが、当てないよりはましだった。

直射日光はきつすぎるので、間接的に。ほんの数十分。

障害が酷いほど、能力が発現したときに強力であるという通説がながれていたが、これはあんまりなのではないかと両親は隠れて何度も涙した。

5歳になった今も、酸素ボンベとマスクが手放せず、体は発育不良。毎日の日光浴で、肌はほんのり焼けてはいたが、健康とは程遠く見える。

年に1回程度、ホワイトとブラックが出合えるように、場が設けられていたのだが、それにすら出席できないことがあった。これはホワイトとして別段珍しいことではなく、健康であることが奇跡とされていた。ブラックも同様であり、出会うことによって能力が発

言する前まで、彼らは非常に弱かったのである。

弱い彼らを、将来の確実な有望さからサポートの手があるのだが、周りの人々では現状を打破することはできなかった。

ホワイトにはブラックを、ブラックにはホワイトを。

ことわざのような標語のような、ある意味数式とも言えるようなこの言葉だけが、ホワイトとブラックの救いなのである。

5歳になったヒスイは、未だブラックに会えず、本人にとっては当たり前の苦しさと共に日々を過ごしていた。

突然視力の低下に見舞われた少年をソーディルという。ソーダライトのような、濃い藍色の瞳を持っていたので、そう名づけられた。プラチナブロンドの髪に、その目の色はよく映えていて、人々の視線を釘づけにしたものである。

あの日までは。

今は分厚いレンズに隠されて、のっぺりとした藍色にしか見えず、視線が定まらないせいも、事情を知らない人には不気味に見えていた。

ふらりふらりと、動作もいけなかったらしい。定まらない視線も相まって、第一印象が最悪になる。

視力だけだというのに、それは多大なる足かせとなってソーディルを苦しめていた。

心無いいじめもあった。

ソーディルが悪いわけではない。普通に生活をしていただけなの

だ。

ただ、全ての動作が遅く、それでも失敗したりする。その様子を見て、ノーマルの一部分が言うのだ。

気持ち悪い、こちらを見るな、寄ってこないで。

ホワイトとブラックは、当然のごとく何も言わない。それどころか温かく見守り、時に手助けする。自身が経験してきたことだ。その辛さは誰よりもわかっている。

ただ、ノーマルの一部分が理解できずに、そう言葉を紡ぐ。

もしかしたら、妬みもあったのかもかもしれない。対となる存在に出会えば、力が手に入るということに。

大人でなければ、望みもあったのだ。ホワイト、もしくはブラックになる可能性がある。

しかし、それも18歳になる頃まで。それ以降になった者の話は聞かず、なつたとすれば、情報は世界をかけめぐっている。運命の日からかなりの年数がたち、その可能性はほぼ0に近かった。

ソーディルが8歳を迎える頃、年に1回程度行われる出会いの場に両親に連れられて足を運んだ。

自分のホワイトを探すために。

いろいろな地域で行われており、同じ時期に開催されるように調整されていた。

植物から生み出された回線で、それぞれの会場を繋ぎ、少しでも出会う確率を高めているのである。

様々な症状を抱えたホワイトやブラックが、両親や親類に連れられて会場入りしていた。

対の相手に出会えば何か感じるという。

しかし、ソーディルは何も感じる事が出来ず、ふうっと小さなため息をついた。

期待をこめて、他の会場が映し出された画面を見るが、おぼろげな視界でとらえたそれにも、何も感じない。

長時間粘ったが、欠片ほども何も感じない。
そのうち、人の多さと、動き回る人を見続けたせいで、気分が悪
くなってくる。

隣に立つ母親の服を引っ張る。視線が巡ってきて、両者の視線が
交わった。

「帰る」

おぼろげな視界に、ほんの少し哀しげな母親の表情。

「わざわざ見なくてもいいのよ」

見なくても相手はわかる。そう、知っている。

両親はノーマルだが、必死に知識をかき集めたのだ。

「うん、でも、帰る」

相手を見つけたという気持ちもある。

けれど、歓声が上がるとび辛いのだ。

対の相手が見つかった歓声。喜び。

見たくなくても、つい見てしまう。その笑顔。

そんなときだけ、偶然にも視界が良好なときで、明瞭に見える。

「そう、行きましょつか」

車中での母親の言葉が気になった。

「ソーデイルのホワイトも、今辛いでしょっね」

対の相手が、
気になり始めた。

第1章 1・姫と従者の苦難（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。
もしよろしければ、また次回お会いしましょう。

お気に入り登録してくださった皆様、ありがとうございます。

第1章 2・従者、ホワイトをおもっ

本当はずっと以前から気になっていたのかもしれない。対であるホワイトである人を。

心の奥底では、ずっと、ずっと。

どんな人なんだろうとは思っていた。

対が生まれた頃に不安定な視力の低下が起こった。

この時期は前後するらしいが、数ヶ月程度のものらしい。

自分のホワイトは、約3つ年下である。まだ見つからない。

今ソーディルがもっている情報はこれだけ。

「会いたい……な」

世界が揺れているような、不安定な視界が落ち着くから、早く会いたいと思っていた。

今は、違う意味で会いたかった。

手に力がこもり、ぎゅうっと握りしめ拳を作る。

「辛いつて………どういう風に辛いのかな。

痛いのかな、苦しいのかな」

危険が無いように、最小限の荷物に抑えられた自室で、ソーディルは思う。

「早く、会いたい」

そうすれば、お互いに辛くなくなる。

年に一回程度の出会いの場、出席できるホワイトは、実はかなり少ない。障害が、彼らの足かせとなって、唯一の救いであるブラックと出会うことすら阻むのだ。

ホワイトに関しては、症状が酷く命に関わるものであればあるほど、発現する能力が高くなる。

親にとって見れば、たまったものではない。

我が子が苦しむさまを、間近で見ていると宣告されるのである。

それゆえに、ホワイトが生まれたことを喜ぶことが出来ない。対が出会えて、初めて喜ぶことが出来る。

これまで、出会えなかった事もあった。初めの頃の過ちである。今は少なくなったとはいえ、完全に無くなったわけではない。

ブラックは障害が消え、耳朶から黒っぽい石が剥がれ落ちることで、対が亡くなったことを知る。

始まりとは違い、この時間だけは正確で、ホワイトが世界から居なくなったときをブラックに知らせる。

嘆く。

一言で表せば、それに尽きる。

出会えなかった、間に合わなかった。激しい後悔に苛まれ、ブラックはノーマルとなる。

対の、終焉。

そうならないように、ソーディルは願う。

「早く……早く……」

願って願って、願い続けて。

12歳を迎えた。

願いは未だ成就されず、対とは出会えていない。
出会えていれば向かうことの無い会場に、今日足を運んでいる。
対を求めて、対だけを求めて。

会場内では、ざわざわと熱気が溢れている。

そこかしこで歓声上がるたびに、ソーディルは心臓をぎりぎり
締め付けられている気分である。

今年も、駄目なのだろうか。そんな想いととも、会場に居た。
時間が無いことを、自覚していた。手遅れにならないかと、焦っ
ていた。

知らず知らずのうちに手に力がこもっていたらしく、母親と繋い
でいた手をぐいっと引っ張られた。

「痛いわ、ソーディル。」

「……居ないなら、帰る？」

繋いだ手の力を抜き、躊躇いつつも頷いた。

外へ出ようとしていたときに、遠くから微かにサイレンの音が聞
こえてきた。

運命の日以前にもあった、救急車のサイレンの音である。自然に
害をなさない使用にして、過去の目的と同じように今も走っている。
少しずつ少しずつ、近づいてくる。

会場は安全のためか、病院近くに設定されるため、こういうこと
が当たり前にある。

ただ、今回はソーディルにとって当たり前ではなかった。

何かに、引っ張られている。

救急車が近づくにつれ、それは強くなっていき、ついにソーディ
ルの全てが牽きつけられた。

水面のように揺れていた世界が、ぐにやりと歪む。

「あ……」

分厚いレンズの眼鏡を片手でむしり取った。長い付き合いのそれだが、思い遣っている暇はない。

のっぺりとした藍色が、久方ぶりに本来の輝きを取り戻す。

「俺、行ってくる!」

母親の手を離し、返事も聞かずに走り出す。近づき、遠ざかろうとしている救急車に向かって。

走っている車はとも早いのだが、ソーディルは難なく追いついた。

片手を振りかざし、思い切り叩きつけようとしてから、思いとどまる。代わりに、窓をノックすることにした。

「止まって!」

明瞭になった視界で、行動に起こす全てのが容易い。

ゆるゆるとスピードを落とし、完全に停車したと見ると、すぐに後ろの扉を開けた。

他の誰でもない、その人だけを見る。

熱が出ているのか、赤い顔をしている。潤んだ瞳はエメラルド色で、とつても綺麗で。

「やっと、会えた……」

黒い髪を持つ少女が、自分のホワイトだと知った。

さらにもう一つ、沸きあがる歓声は本人たちではなく、周囲が上

げているのだと知った。
歓声を上げるよりも、歓喜に浸るほうがよかった。

第1章 2・従者、ホワイトをおもっ(後書き)

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

次回は、この話の姫側になります。

じりじり進みますが、お付き合いいただけると嬉しいです。

第1章 3・姫、ブラックを考える

呼吸を、する。息を吸って、吐いて、吸って、吐いて。

ヒスイが、第一に考えなければならぬことである。それが少しでも出来ないようならば、すぐに意識が遠のく。

酸素が満たされた小さなテントで眠り、そこで食事をとり、そこから出る時には酸素ボンベとマスクを着用のこと。

生まれてからずっと、続けてきた生活。それも、8年が過ぎ去った。

8歳というには、成長不足な体つき。ぱらりぱらりとそばかすの散る肌は、ほんの少し日に焼けている。5歳の頃から成長は見られしたが、年相応に見られるようになるには、まだまだとしか言いようが無い。

そんな彼女は、目下努力中である。

大雑把な目標、体力をつける。細かく羅列すれば、車で片道30分の距離を耐えられる体力。行程を考えれば、往復1時間。並びに、目的地で過ごすための体力。

たかが30分、されど30分。

これがクリアできないことには、出会いの場へ行くことができないのである。

会場入りしました、すぐさま病院に連れて行かれました。何てことでは、いけないのだ。博打のような行動は、命に関わってくる。運よく対の相手に出会えばそれでも良い。しかし、ブラックもまた障害に足止めされて、参加できない場合もあるのだ。

もしもホワイトがそんな無理をして、対の終焉を迎えれば、ブラックの嘆きは計り知れないだろう。

だから、ホワイトは無理をしてはいけない。

ホワイトの障害は、命に関わる割合が高い。無理をすれば、結果

は教えられずとも分かる。

それでも、無理をしてしまう人が、数年に一度現れる。だから、会場は病院に近い場所が選ばれる。それ以外の場所にいけない。万全の体調で参加しても、途中で悪化する場合もある。

最悪の事態を免れるために、病院は必ず必要なのである。

ヒスイが少しずつ努力した結果、今では片道15分なら何とかなるようになった。

ホワイトの家を順に回る移動病院のドクターが、今のペースでいけば、来年ぐらいには参加できるだろうとってくれた。

ヒスイは嬉しくて、笑顔を浮かべる。

「いけ……る？」

マスクに覆われた口元は、言葉を発するには不向きで。呼吸最優先のヒスイは、単語すらも途切れがちである。

しかし、ドクターは慣れたもので、気にもしない。

「ああ、行けるよ。ヒスイちゃん、今までよく頑張ってきたね。

このまま無理せずに体力をつけていけば、ブラックに会いにいけるよ。」

このドクターこそ、元ブラックであり現ノーマルである人で、ホワイトが無理をしてはいけないことをヒスイに言い含めた人である。過去のそれを話すとき、20年以上前のことなのに涙が自然に溢れてきて、どれほどの嘆きであり悲しみであり、無力感に苛まれるかを語る。この人が各家のホワイトを回り、昔の話をする事で、ホワイトが無茶をする事が減った。ドクターにとつて酷であるが、ストッパー役としてこれほど適任の人は居なかった。

その日の夜、酸素を適度に詰め込まれた小さなテントの中で、ヒスイは考える。

未だ出会いに行けぬブラックを。

「ドクター、……みたいなの……人……？」

元ブラックである人は、とても優しい。ホワイトに対しては、特に。

どうしてそんなに優しいのかと聞いた答えが、「出来なかったことをしてるからじゃないかな」であった。

浮かぶ微笑に、誰に対してなのかを悟る。その時、目に浮かんでいた悲しみを、深く受け止める。

絶対に、ブラックにこんな目をさせてはいけない。

私が生まれたときに、ブラックとして障害が出てしまった人多分、年上の人。

「もう……少し、……だから」

待っていて欲しい。

必ず、会いに行くから。

願いのような、誓いを立てる。

8年と少し、障害を受け続けている人を考えて。

ヒスイの努力は、続いていく。

努力するということは、何かしらの結果が伴うものである。

ヒスイの努力は、そうなって欲しいという結果に、正しく当てはまった。

出合いの場へと、参加できる体力を手に入れたのである。心穏やかに、ゆるやかに行動すれば、大丈夫だろうとドクターも言った。

こうして、目標とした日を迎えた。

両親の準備も万端で、一分の隙も無い。

会場へと向かう車中は、穏やかだった。

ボールが、跳ね出てくるまで。

公園からボールが飛び出した。子供が遊んでいれば、偶にそんなこともある。

それが、ヒスイが乗った車の前を横切った。

それは赤い色をしていて、人の注意をよく引く色であった。

ヒスイは予想外の出来事に、驚きからひゅっと息を吸って、呼吸を止めてしまった。

リズムが、乱れる。一度乱れたものは、なかなか元に戻らない。

呼吸をしよう、しなければと焦る気持ちだが、ますます事態を悪化させる。

短く、乱れたリズムで繰り返される呼吸。それでは、ヒスイの肺で酸素を取り込むことが難しい。

ぼんやりとしたはじめた思考に、両親の呼びかけが壁の向こうの世界から聞こえる。

会場の近くには、不測の事態に対応するために、救急車が配置されていた。

ヒスイはそれに乗せられ、目標としていた会場ではなく、病院へと向かうことになった。

水中に居るように、全ての音がいくつもの膜を通して居るかのよう
に聞こえる。感覚もそれに追従して、口元を覆うマスク、力強く
握り締められた両手、体を覆っている服など、全てが意識から遠い。
たゆたう意識が、ゆっくりと思考する。

会えないんだ。

辛いとか苦しいとか、それよりも、そのことが嫌だった。

感情に体が反応して、嫌というサインを出す。反応したのは涙腺。
じわりじわり、涙が溢れる。

約9年分の努力が壊れて、ほろほろ崩れるさまを見るかのように、
涙が零れる。

とろりと粘度を帯びたような思考は、一つしか考えられなくなる。

会えない、会えない、会えない。

ただひたすら、そののみ。

会場の近くに救急車が来たとき、ヒスイの中の何かが、呼んだ。
泥の中を這っていたような思考が、ゆるく、しかし確実に上昇す
る。

呼吸をする。深く吸って、吐いて、吸って、吐いて。

霧が晴れるように、ヒスイは意識を取り戻す。

瞬きを繰り返して、涙を散らす。両手のそれぞれを掴んでいる両親
に、力を込めて握り返し、訴える。

「止めて」

マスク越しではあるが、明瞭な一言。呼吸を最優先させなければ
ならない娘の、はっきりとした一言。

今まで聞いたことのないそれに、両親の表情は明るくなり、希望

を見出す。

娘の希望を叶える為に口を開きかけた時、コココンッと軽やかなノックが響く。継いで、「止まって！」と少年の声。

遅いとはいえない速度の救急車と並走する少年が居る。

救急隊員達に困惑が走るが、ヒスイの両親も同意する。患者の意思であり、両親も反対しないのなら止まらないわけにはいかない。

それでも容態を気遣って、緩やかにスピードを落とす。

患者であるヒスイは、半身を起こし、自らの手でマスクを外して、大きな大きな深呼吸をした。

「……息苦しくないって、良いね」

気分が高揚して、心臓の脈打つ速度が少しばかり速くなる。

救急車が完全に停車した、と同時に後ろの扉が外から開けられた。

プラチナブロンドの髪と、濃い藍色の瞳を持つ少年が、走ってきたにも係わらず、息も乱さずそこに居た。

天使ってこんな人のことを言うのかもしれない。ヒスイがそんな感想を持つ程に、少年の配色は見事だった。

「やっと、会えた……」

見つめられるままに見つめ返していたら、喜びをにじませた言葉が、少年の口から飛び出す。

認識するよりも前に、ヒスイも知っていた。天使のようなこの人が、自分のブラックなのだ。

両親と、救急隊員の人たちと、何かと集まってきた人たちが、歓声を上げている。ここで、奇跡的に出会いがなされたということに、喜びわいている。

さらにもう一つ、ブラックに出会えた事で、認識するよりも知っ

ていた。

世界は、水に包まれている。

第1章 3 姫、ブラックを考える（後書き）

こうして二人は出会うことが出来ました。
もう少しの間、シリアス展開が続きます。

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

第1章 4・姫と従者、対の仮登録をする

病院へと向かうはずだった救急車はその進路を変え、出会いの場へと新しく出会えた対の二人の運んだ。救急車出勤時に見られる緊迫した空気はそこには無く、隊員には笑顔が見られる。

そんな車中で、対の二人は隣に座り、時々合う視線のたびに微笑みあうという、初々しい恋人同士のようなことを繰り返していた。

件の会場に到着し、降りたソーディルを待っていたのは彼の母親だった。

「これ、もういらないのね」

彼女が手に持ち振って見せたのは、ソーディルがこれまで愛用してきた眼鏡。重たげなそれは、成長するに従って、フレームを変え、レンズを変えと共に生きてきたが、それも今日までのこと。

母親が幾年も見ていなかった満面の笑顔が、ソーディルを彩った。彼の傍らには、細い細い小さな女の子。彼女がホワイトなのだろうと推測する。

それまで緩やかに湛えていた笑みが、ぐっと深くなる。ソーディルの母として、ホワイトとの邂逅はただただ嬉しかった。恐らく8歳になるだろう、ホワイトのあまりに小さな体躯が、これまで必死に生きてきたことを物語っている。

救急車で運ばれていたということは、終焉の可能性すらもあったということだ。最悪の事態にならず出会えたことに、奇跡のようなものすら感じる。

今日この時から、二人は新たな道を歩み始めるのだ。

「登録の係の人、待ってるわよ」

言葉通り、その人たちは待つていた。救急車から連絡が入って、到着までをやきもきしながら待つていたのだ。

新たな対が出合えたのは嬉しいことで、それが命の危険にまで陥りかけていた時に出会えたのだから、喜ばない筈がない。そうでなければ終焉を迎えていたのかもしれないのだ。

無事であることの喜びに、出会いの喜びに、係の人たちは満面の笑みである。彼らが二人を見る目は優しい。そして、待ち焦がれている。

彼らがいるのは、会場の一画。出会いがあるたびに会場の中を動き回っては混乱をきたす為、対象の二人に来てもらうという規則になっている。動けないから、目線だけ送る。早く来てほしいと。

係の人たちの表情と感情を、今では確実に読み取れるようになったソーディル。確かに待たせていたのだと悟る。

「行こう」

傍らの少女に、手を差し出す。細い指をもった細い手が、ゆっくりと重ねられた。

「はい」

ヒスイに合わせられた歩みは、速くはないが確実に目的の場所へと進む。いや、進んでいた。ブラックである少年が歩みを止めるまで。何事かと少年を見上げれば、その目線は少女に注がれていた。しかも、なぜか軽く困った表情で。

「ん〜……あの、ね」

きよとりと見返す少女の目線に押されるように、続きをつむぐ。

「まだだったなと思って。

名前、名乗ってない」

少女の鮮やかな翠の目が、零れ落ちるのではないかと危惧するほどに、見開かれた。

「……あ。

あのっ！

私、ヒスイ、です」

一言一言を丁寧に、ゆっくりと話すヒスイに、ソーディルは言えなかった。ヒスイの名前を既に知っているとは。理由は簡単で、会場に着くまでの車中で、少なくとも10回はその名前が呼ばれ、ヒスイが返事をする様を見ていた。

分かっただけで当然なのである。

けれど、ちゃんと名乗ってくれたことが嬉しくて、ソーディルは笑みを零す。

「俺は、ソーディル。

これから、よろしく」

「よろしく、お願い、します」

ヒスイの素敵に丁寧な言葉に、ソーディルの顔が曇る。

「敬語、いらない。

ずっと一緒にやっていくんだし。

普通に話してくれていいから」

「はい……あ、うん」

反射的に良い子のお返事をしてしまったヒスイ。ソーデイルの顔が曇ったままなのに気付き、砕けた言い方に直す。

途端に現れた笑みに、ヒスイも笑顔になる。

お互いに笑いあって、今度こそと進みだす。

「うっわ……」

というソーデイルの呟きとともに、あっさりとその歩みは止まった。

二人の目線の先には、目的地。先程までは目線だけを飛ばしてきていた係りの人たち。早く来てほしいという思いが、とうとうボデイランゲージとして表れている。

手招きをする人達。手だけでしている類ではない。水中であれば見事な推進力が得られそうですね、と評価されそうな素敵な手招きである。肩を痛めないかが心配である。

そこまでは、普通。過剰ではあるがまだ普通である。

そんな中に、一人だけ居た。パントマイムをする人が。二人に紐が結び付けられているとでも言うように、ぐいぐい引つ張るパントマイム。

ヒスイはそれを食い入るように見ている。顔を彩るは笑み。嬉しそうなのは、その輝きださんばかりの笑顔だけでなく、ソーデイルと繋いでいる手に入る力からもわかる。

演者にとって、その反応は満更でもなく、本来の目的から演じ楽しんでもらうことに目的が切り替わる。

必死に必死に引つ張る。その様子が、話しに聞くピエロのようで、ヒスイは思わず笑いをこぼす。

その隣で同じように笑いをこぼしていたソーディルが、ふと思いついて受付に居る人とは程遠いけれど、綱を持ち上げるような動きを試してみる。

「引っ張り返しちゃう」

はい、とソーディルの手からヒスイの手へと、見えぬ綱が渡される。ぎこちなく見えぬ綱を握った手を見て、期待をした目でピエロのような人を見て引っ張る、という行動を試してみる。引っ張って、綱の形を作っておくのを忘れてしまつて、最後には小さな握りこぶしになっていた。

それでも、引っ張られた格好で大きくよろけるピエロのような人。おかしくておかしくて、二人でくすくす笑いあふ。

「……笑すぎて、もう腹痛いかも……」

「わ……私も……」

笑すぎて、涙すら浮かべた二人はようやく動き出す。

ただ、ヒスイは歩けなくなるほど笑ってしまったので、ソーディルに抱き上げられての移動であったが。

笑すぎて紅潮した顔で、二人は受付に迎えられた。

説明を受けた二人は、会場の外でそれまで繋いでいた手を離す。

「じゃあ。また明日」

「うん」

笑顔で手を振り合って、それぞれの家へと帰っていく。
明日、何が起こるかを知らないまま。

目覚めたホワイトと、目覚めたブラック。

目覚めた二人への初めての試練が、明日に控えていた。

第1章 4・姫と従者、対の仮登録をする（後書き）

遅くなりました……（汗）

しかも、さらに次回に引っ張ってます。

次の話で、第1章は終わりを迎える……といいな。そんなあやふやな感じで、お話が漂っています。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3993m/>

冴えない姫と見目の良い従者

2010年10月10日17時12分発行